

古希を迎えるにあたって

札幌市医師会
西成病院

西 研

私は団塊の最後の世代で、同級生も多い時代に育ちました。進学競争も激しく、なかなか大変な時代を過ごしましたが、それなりに充実していたと思います。その後、定年退職を迎える時に、還暦のお祝いに高校の同期と一泊の温泉旅行に定山溪へ行きました。総勢百数十人でなかなか盛大で深夜まで、飲んだり騒いだりしたものです。それから、10年近く経ちました。この間に他界した級友も何人もおりますが、私の周りの旧友はそれなりに元気で毎年高校同期会に出席し、旧交を温めています。

昭和58年、実家の手伝いのため、東京から帰札し、父の所属する北大医学部第三内科に入局しました。その時から、実家の手伝いを週1回行う研究日を頂き、実家の内科診療兼放射線技師兼看護師のような手伝いをずっと続けておりました。父は口やかましいため、実家の医院に勤める看護師がおらず、それまでは父と薬剤師の母の二人で医院を切り盛りしておりました。

私はその後、医局人事で関連病院の勤務となり、昭和63年、札幌通信病院（現・NTT東日本札幌病院）の勤務となりました。その3年前、上司であった、小笹茂先生が札幌通信病院の部長として入職することになり、グループの皆で部長室まで荷物を運びました。まさか自分も同じ病院勤務になるとは夢にも思いませんでした。消化器の医師としては、内視鏡もほとんどできない状態であったのですが、とりあえず病院に来てくれればいいと言われ、軽い気持ちで就職しました。その後、給料は安くても、内視鏡検査件数が多ければいいと考え、日々研鑽に励みました。ある時忘年会の集まりでカラオケに行った時、大分酔っていたのですが、ナースから「何が得意ですか？」と聞かれ、即座に「ERCPです」と答えたため、皆の失笑を買ってしまいました。

医局長からは「2年間勤務したら、辞めてもよい」と言われていました。また、日々多忙で毎日帰りが遅いため、父親から「いい加減にしろ」と叱責されていましたが、何と定年までの22年間勤めることになってしまいました。定年の時、普通は実家が医院であれば後を継ぐのが世間の慣習ではありますが、その時の幼馴染である西成病院理事長の河口先生から、常勤の消化器内科の医師がいないので来てくれないかと誘われ、父に話したところ、今まで通り実家を手伝うのであれば勤めてもよいと許しを得ました。私もこの時、生涯現役で、まだ、内視鏡の検査

治療を続けたいという意志が強くありましたので、勤務することとなりました。

帰札後は父の所属する東区の医師会に入っていました。NTT東日本札幌病院での勤務中でも東区医師会の所属でした。しかし、忙しさに感けて会合には出たことはありませんでした。西成病院に就職した時、所属医師会が手稲区に変更になっていたのを後で知りました。その後、区の役員会を通して、いろいろな病院の先生と出会うことができました。手稲区の医師会はアットホームな雰囲気での感性にも合っており、医師会の会合にはほとんど出席しております。

西成病院勤務後、院長職を拝命することとなりましたが、当初は消化器内科医として支援する程度のものでしたので、断ろうと思いつつ父に相談しました。院長となれば実家を簡単に継ぐということはできなくなることを話しましたが、意外にも「やってみろ」と言いました。「病院がうまくいくかどうかは事務長次第だな」とも言いました。父も医局人事で道内の国保病院をあちこち転勤しておりましたので、経験からそのように言ったのでしょうか。西成病院では事務長は何人が替りました。しかし、この医療制度の中、病院は何とか運営されております。その後、父に医院の後を継ぐのは難しくなると話すと、父は「閉院という時にはお母さんが何というかな」とボソッと云ったのが、今でも脳裏をかすめます。私にも医師になった息子がいますが、当分札幌には帰ってきそうもないので、閉院のままでしょう。

父は平成28年11月1日に他界しました。透析治療を行っていて、毎日怠い、苦しいの連続でした。私の三男が10月30日に結婚式を行うことになっていたため、それまでは何とか頑張ると励ましていましたが、「駄目だ、持たない」と話しながら、字の大きなカレンダーを家人に持ってこさせて、毎日カレンダーとにらめっこしていました。10月30日は父も比較的落ち着いて、式も無事行うことができ、ほっとした矢先、10月31日、父に結婚式の写真を見せて無事終わったことを報告したところ、それまで何とか頑張ると気力で生きていたのが、タコの糸が切れるようにその日の午後から急に具合が悪くなり、翌日透析を行う予定の時間に永眠しました。

それから2年が過ぎ、私も古希と言われる歳になってきましたが、父のような気概を持って、生涯現役を通すことができるか、最近時々思い悩む今日この頃です。内視鏡医としていつまで続けられるのか、葛藤の日々です。